

旧齋藤家別邸・保存運動の経緯

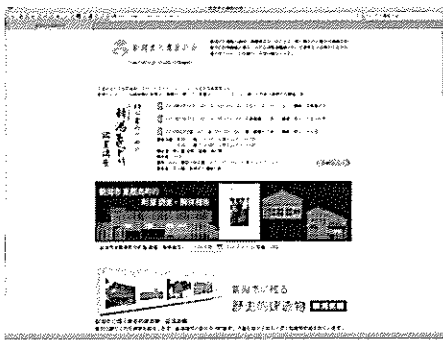
旧齋藤家別邸の会事務局 新潟まち遺産の会事務局 伊藤純一

6月9日オープン初日、旧齋藤家別邸(以下別邸)の1階入り側縁に座り庭を眺め徒然思いを馳せた。強い日差しがないので陰影が抑えられた庭全体が美しい。つつじの花が見頃で紅葉の葉も小雨に触れて艶々している。こういった空間を作り出す日本人はすごいな、そういった感性を持つことができ

る日本人でよかったな、そしてこの素晴らしい邸宅庭園が新潟にあり新潟人でよかった、新潟を誇りに思う、そして後世にその誇りを受け継ぐことができ、きて本当によかった、そんなことを思っていた。保存運動で東奔西走しまともに仕事ができないきつい時期もあったがそんなことをすべて忘れさせ癒してくれる空間がそこにはあった。いろんな思いが頭をめぐり感無量のひと時が静かに過ぎていく。

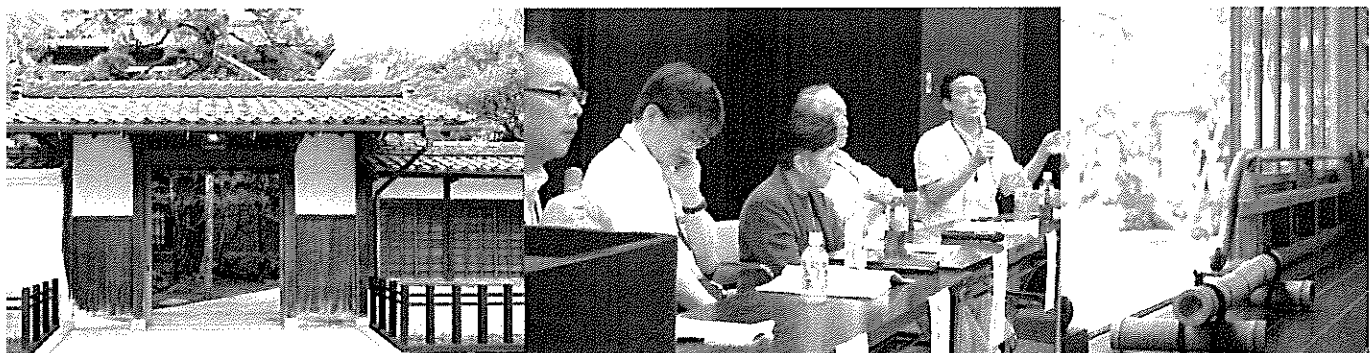
保存運動から今に至る経緯は小田代表をはじめ寄稿者も触れている事と思うが、私なりにも簡単に振り返りたい。

私は新潟まち遺産の会という新潟を歴史が感じられる街にしたいという理念の下活動している市民グループの事務局を務めている。当会の代表である大倉宏は町屋や近代建築



まち遺産の会ホームページ <http://machi-isan.sakura.ne.jp/>

の存続の危機に幾度も直面し保存運動にかかわってきた。新潟の歴史的町並み、建造物の存続や行く末に関して敏感に反応する私達のもとにこの別邸の存在、動向、そして存続の危機の情報が入ってくるのにその時間は要しなかった。この別邸の価値を一番熟知して行動を始めていた陶磁協会の小田先生と保存運動の経験者である大倉がともに運動を始めるに何も障壁はなく、今から7年前、2005年にすでに関係各所への要望書提出が可能なのでネットワークは広がり準備は整っていた。しかし当時はまだこの邸宅には住んでいる方がおりその方を知る小田先生の配慮の意から要望書の提出は時期を見極める状態が続いていた。当然水面下では当地の開発、売却の話がささやかれ緊張感が続く時であった。



その後状況を鑑みこれ以上行動を控えるのは手遅れの可能性もあると判断2007年12月28日、市長、市議会議長、所有管理会社に要望書を提出。この別邸の存続の危機を世に知らしめる事となる。ここからの活動は加速度も付き活発になる。この別邸の危機を脱却するため、この別邸の保存運動のための会「旧齋藤家夏の別邸の保存を願う市民の会」の立ち上げを準備し、ネットワークを固め8月3日の発足準備会を経て小田代表、小山、大倉両副代表の体制で会が発足し運動を展開した。

市民の声を盛り上げていく必要があったが、署名を集め様にも今まで個人の邸宅だったため知る人ぞ知る的存在でまだまだ認知度が低い。なんとか良好の環境で市民にこの存在、価値を知ってもらう必要があるということ、所有者に懇願し一般公開の実施を目指した。その一般公開において大きな力を貸していただいたのが

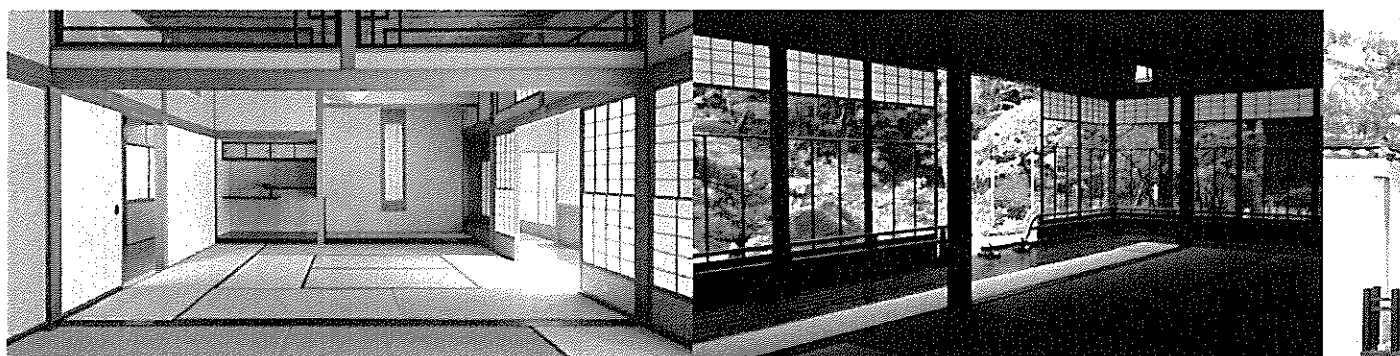
茶道の団体、造園関係の団体の皆様。

元々この邸宅では定期的にお茶会が催されており多くの茶道関係者にはその存在、価値が知られていた。小田代表はその関係者からも人望が厚く、邸宅の保存価値に加え、小田先生のために一緒に運動する、といったお茶の先生方の力は大きいものだった。一般公開、署名活動と多くの方々よりご協力をいただいた。

造園関係者の間でもかつてよりこの庭園の価値は伝えられており文化財調査の対象になっていたことは業界内の業者や所有者のご好意により多くの造園関係の人々が見学経験を持っており、この庭園を喪失してはいけないという価値を認識していた。一般公開のたびボランティアで手入れをしてくださった庭師の人数は延べで86人にのほりその手入れのおかげで美しく整備された

庭を市民が見ることができ、これは残すべきだと保存の価値を認め多くの署名を集めることにつながった。

加えて保存運動の経験を持つ当会、新潟まち遺産の会を含むまちづくり系活動団体の協力の下、一般公開を3回(8月24日、10月25日、11月30日、延べ5624名の入場者)街頭署名活動3回(9月14日、9月15日、10月19日)を含め約26379人から保存を願う署名を集めることができた。市長、市議会議長への署名簿の提出は9月25日、12月22日の2回にわたり、多くの市民の声を持って市議会に公有化の請願を2008年9月議会に初付託、一度は保留案件になるもついに12月市議会で公有化が認められた。正式には本会議を経ての決定事項ではあることは知っていたが、12月16日総務常任委員会での採択の瞬間は感極まるものがあったことを今でも思い出す。



その後は公有化決定を受け、保存を願う市民の会から「旧齋藤家別邸の会」へと発展的移行、改めて、別邸の価値を掘り下げ、活動や、耐震改修手法等整備に関して提言、良好な活用方法ができる様さまざまな活用方法を提案実施してきた。活動の実績は別途記載する。

保存運動を経て公有化後行政に意見を届ける活動、そして指定管理者の選定まで活動は長きにわたってきた。今後別邸の管理を担当する者の中には一緒に運動をしてきたメンバーもいる。まだ文化財指定という願いも残ってはいるもの、ここまでの運動を一区切りつけるということで旧齋藤家別邸の会は解散することと



2012年6月、開館にあたってのテープカットの様子。

なった。これからは一ファンとしてこの別邸の価値、魅力を享受しそして多くの市民、県外客にアピールしていくこととなる。

あらためて庭を見ながら思

い出した言葉がある「もしこの別邸が無くなった後にその存在を知った人はその周囲にいた人間を笑いにするよ、笑われてしまうよ」と。かつて新潟市民は幾度となく笑われても仕方ない様な事を行って来たのではないか。そんな負の負の目が蓄積され今回の運動の力になったのではないか。もしこれが10年早い事だったらこの別邸は残っていただろうか。この別邸が残るために失ってきた物があるのではないか。残った物は今後未来に向けそんな他の物件の為に伝え継ぐ必要があるだろう。

日本庭園、歴史的建造物というと年配者の専売特許のように思われるが、この別邸は違い、ど

んな年齢の人間にも感動を与える。今、日本という新潟というアイデンティティーが失われつつある中、特に若い世代にこの別邸を通じ、思い、感じ、そして次の世代へと伝えていただければと思う。日本人でよかった、新潟の人間でよかった、と。



新潟日報「assh」誌表紙より